『五輪九字明秘密釈』における五臓理解

――覚鑁の成仏論の特質として――

亀山隆彦

序論

覚鑁（一〇九五―一一四三）『五輪九字明秘密釈』で、即身成仏、ないし現身における五智成就の大事とされるのが、同じく現身の内に「蓮華の下に向くが如く」[1]配される肝・肺・心・腎・脾の五臓と、それらを観想の対象とする、「五蔵（臓）三摩地観」とも呼ばれる観想法である。同観法の詳細は、『五輪九字明秘密釈』では「第二正入秘密真言門」中にあり、その記述によれば、この五臓三摩地観には、更に、以下に紹介する二種の別が存在する。

一つは、[梵字]阿〈a〉[梵字]鑁〈vaṃ〉[梵字]藍〈raṃ〉[梵字]唅〈haṃ〉[梵字]欠〈khaṃ〉の、胎蔵界五輪の種子を肺から脾までの五臓に印し、その五字ないし五臓を地・水・火・風・空の五輪と観想する、『五輪九字明秘密釈』では、善無畏（六三七―七三五）伝ともされる五臓三摩地観である。[2]五字厳身観に代表される、胎蔵界系統の「身体マンダラ」観に類する瞑想法でもある。[3]

もう一つは、[梵字]〈vaṃ〉[梵字]吽〈hūṃ〉[梵字]怛囉〈trāḥ〉[梵字]纈唎〈hrīḥ〉[梵字]婀〈aḥ〉の五字を、脾・肝・心・肺・腎それぞれの「本覚」とし、更に五臓相尅の理に随って、一々の字の意義を順次に観想するとの同三摩地観である。〈vaṃ〉から〈aḥ〉の五字は、『金剛頂瑜伽中略出念誦経』では如来・蓮華・金剛・宝・羯磨の五部の真言、[4]『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経』では五大虚空蔵の真言とされる。[5]対して『五輪九字明秘密釈』は、「〈vaṃ〉の一字を以て変じて」成る、胎蔵界に対する金剛界の五輪の種子とし、その観想と字義の顕現によって、行者の内に五智が成就されるとも説く。[6]

前者の、胎蔵界の系統に属すと目される五臓三摩地観については、古くは、那須政隆氏[7]や吉岡義豊氏[8]から、近年のヘンドリック・ファン・デル・フェーレ氏、[9]松﨑惠水氏[10]のものに至るまで、多数の研究成果が残される。[11]その松﨑氏の、この胎蔵界の五臓三摩地観を指しての評は、次のようなものである。同観は、「五字厳身観を本拠として、これに中国古代の宇宙論である陰陽五行説、道教の不老長生の内観法である五蔵観を取り入れ、さらに空海の六大思想を合わせて（中略）自身がそのまま六大法身であるとの観を具体的に観ぜし

める即身成仏の観行として示された」と言う。[12]

後者の、金剛界五輪の種子を用いる五臓三摩地観には、先の那須氏、田中文雄氏[13]、陳金華氏[14]が検討を加えている。最初に、那須氏の評するには、この五臓三摩地観とは、ただただ、「五行の相尅に託して」示された「五智開発の観行」である。[15]田中氏の見解も、概ね那須氏のそれと同様で、「密教思想を以って五臓を解釈しているというのではなく、むしろ五行思想を以って密教を説明」した、「全く深い身体に対する興味から発する」「中国養生思想と密教との融合」と、同三摩地観を解説する。[16]

中国における「原―自然科学的」世界観とも評されるのが、五行思想、ないし五行説である。そこでは、木・金・火・水・土の五つあるとされる存在の元素が、共に相生・相尅の理に従って循環し、天・地・人を貫いて絶え間なく運行すると教示される。[17]五行の相生は、水→木→火→土→金→水の順で結ばれる、各々の元素が循環的に次の元素を生み出していく道理を述べたものである。対する相尅は、火→金→木→土→水→火の順に一々の元素が続く元素にうち「尅」（か）ち、その勢力を損するとの法則を言ったものである。

また、「五輪九字明秘密釈」でも、五臓がその外に現れ出でて五行ともなり、その五臓＝五行が、ものの形体を成す等と記す。[18]あるいは、木から土の五行の一々が、人身に凝集して肝から脾の五臓となると言った方が、正確であろうか。[19]何れにせよ、五行間に存するとされる相生・相尅の理は、対応する五臓間にもそのまま適用される。その、心→肺→肝→脾→腎→心の順で結ばれる五臓の相尅を用いた五仏・五智成就の為の観法が、『五輪九字明秘密釈』の金剛界の五臓三摩地観であると、那須、田中の両氏はその様に捉える。

最後に陳金華氏である。陳氏は、五世紀の中国の『提謂波利経』の教説に端を発する、中国ないし日本の仏教界で試みられた五行思想と仏教教理の融合の、平安末期の日本における最新の成果として、この金剛界の五臓三摩地観を評する。すなわち、木・金・火・水・土の五行と、及び、その周囲に編み上げられる相互連関的な「五つの要素の分類体系」のネットワークに、金剛界五輪の種子としての《vaṃ》《hūṃ》《traḥ》《hrīḥ》《aḥ》の五字を加えた最初の事例として、同五臓三摩地観を見ている。[20]

以上、右に要約する三氏の理解を鑑みるに、金剛界五輪の種子を用いる五臓三摩地観に関しては、ある肝心の点が未だ不明なままである。例えば、右に紹介する田中氏も、同五臓三摩地観を五行説と密教の融合の結果とはしても、その融合される「密教」が何であるかを具体的に問うことはしない。この金剛界の五臓三摩地観には、胎蔵界の同観における五字厳身観の様な、松崎氏の言葉を借りれば「本拠」となる教説が、未だ見出されていない。[21]相尅の理に随い、五臓間で循環する金剛界五輪の種子と、その循環する種子一々の字義を観想することで、結果的に、行者の内に五智が成就されるとの一連の過程に、密教側の、何らの「本拠」も下敷きも無いとは考えにくい。

覚鑁の『〈vaṃ〉字密観』なる著作には、同じく〈vaṃ〉〈hūṃ〉〈trāḥ〉〈hrīḥ〉〈aḥ〉の五字を用いる「字輪観」と言う瞑想法が説示される。大山公淳氏は、この字輪観について、「要するに月輪中に納つてる諸字に就いて、その旋転を観ずるのが字輪」[22]と解説する。『〈vaṃ〉字密観』では、先ず、〈vaṃ〉以下の五字を五部、金剛界の五仏、その五智を表象する種子真言と定義する。その上で、それらを胸中の月輪に布列し、順・逆に旋転して一々の形相と字義を観想することで、行者の内に転識得智が起こり、五智が発生するとも説く。

この字輪観の骨組みはそのままに、五行思想で以って肉付けした、あるいは、同字輪観を「本拠」として、それを下敷きに五行説や、道教の五臓観を取り込んだものこそが、金剛界の五臓三摩地観と考える。その様に推測されうる第一の、かつ最大の根拠とは、言うまでもなく、共通の種子真言を観想の対象とし、その結果も現身における五智の獲得である。更に、その観想に際して、一方は胸中の月輪、他方は五臓であるが、何れも現身中に種子真言を循環させると言う、両瞑想間の構造的な類似である。

また、『五輪九字明秘密釈』の五臓説そのものと、『〈vaṃ〉字密観』の記述との密接な結びつきも、同じく根拠と挙げられる。『五輪九字明秘密釈』で、〈vaṃ〉〈hūṃ〉〈trāḥ〉〈hrīḥ〉〈aḥ〉を、脾・肝・心・肺・腎一々の本覚と配当する理由は、実は、同書中では明示されておらず、かろうじて、『〈vaṃ〉字密観』中でほのめかされるのみである。すなわち、『〈vaṃ〉字密観』の五智種子真言の説を踏まえなければ、『五輪九字明秘密釈』の金剛界五輪の種子の五臓への配当も、全く説明出来ない。[23]

更に、永仁年間書写の『五蔵曼陀羅和会釈』には、「師伝の五蔵曼荼羅に云わく」として、金剛界の五臓三摩地観がそのまま引用される。その上、同書の冒頭は、『〈vaṃ〉字密観』の「即身成仏の観に云わく」以下の偈の言い換えである。同じく『五蔵曼陀羅和会釈』の冒頭には、〈vaṃ〉と土、〈hūṃ〉と木、〈trāḥ〉と火、〈hrīḥ〉と金、〈aḥ〉と水の、五智種子真言と五行それぞれの対応と、その月輪中への配置も図示される。これらも、先の推論を裏付ける傍証と言える。

『五輪九字明秘密釈』における金剛界の五臓三摩地観

「灌頂の文」を多数掲載する『五輪九字明秘密釈』の中でも、未灌頂の行者にとっては、師の手ほどきが無くては示すことのならない、とりわけの「大事」とされるのが、五臓三摩地観である。

右書ノ中多ク載セル灌頂ノ文ヲ。未灌頂ノ者ハ受ケテ於レ師ニ可シ開ク。就レ中五蔵ノ秘義ハ是レ大事ナリ。能ク能ク受学シテ修スヘシ之ヲ。[24]

その旨を述べる、覚鑁の付した『五輪九字明秘密釈』の跋文の一部である。本跋文は、『五輪九字明秘密釈』の製作時期を知る上でも、重要な手がかりである。

本書を記して後、三摩地に入った覚鑁の眼前に、師の一人であっ

た「宝生房」こと教尋（生年未詳―一一四一）が化現する。師自身、死後に密厳浄土の「古衆」となっており、近々、覚鑁も同浄土に「新生」するであろうことを告げたと、先の引用に続いて述べる。教尋の逝去は、永治元年（一一四一）と言われる[25]。したがって、『五輪九字明秘密釈』の製作時期も同年の以後、覚鑁が没する康治二年（一一四三）までと推測される。

同じく『五輪九字明秘密釈』では、居並ぶ他宗の高僧と嵯峨天皇（七八六―八四二）を前にして、清涼殿中で即身成仏して見せた空海（七七四―八三五）の修した観想法について、次の様に記す。

嵯峨天王ノ仰ニ云ハク、真言宗ノ即身成仏ノ其ノ證何クニカ在ル。謹惶シテ弟子入ルニ五蔵三摩地観一。忽然トシテ於ニ出家ノ頭上一ニ現シ五智ノ宝冠ヲ、於テニ肉身ノ五体一ニ放ツ五智ノ光明ヲ。（中略）故ニ五蔵ノ三摩地ハ秘之中ノ秘。不レシテ起ニ于座一ヲ三摩地現前スル之説ナリ。唯シ弥応キ仰信スル而已[26]。

かつて、即身成仏説の証拠は何処にあるのかと、嵯峨天皇自身が、空海に問うことがあった。天皇から質問を受けた空海は、そのまま五臓の三摩地観に入定し、頭上には「五智の宝冠」を現じ、更に、肉身の五体からは「五智の光明」を放ってみせたと言う。

この「秘中の秘」説であるところの、五臓三摩地観における胎蔵・金剛両界の別については、既に序論でも論及している。前者は、善無畏訳と伝えられる『三種悉地破地獄転業障出三界秘密陀羅尼法』（『三種悉地軌』）に全面的に依拠[27]し、かつ、その『三種悉地軌』、『大日経』や『大日経疏』にも説示される五字厳身観を下敷きともする同三摩地観である[28]。胎蔵界五輪の種子、《a》《vaṃ》《raṃ》《haṃ》《khaṃ》の五字が用いられる。

他方、「金剛界に約」しての五臓三摩地観では、先ずは五臓の相対に従い、五臓一々の本覚である《vaṃ》《hūṃ》《trāḥ》《hrīḥ》《aḥ》の五字間の、「能破」「所破」の関係を観想することを求める。次に、その観想を通じて五字一々の字義が顕現し、更に字義が転じた結果、現身中に五仏とその五智が成就される。

肝ノ蔵ハ色青シ主レル木ヲ。以テ《hūṃ》字ヲ為シ本覚ト以テ《hrīḥ》字ヲ為ス能破ト。何者《hūṃ》字ハ是レ木行即チ肝蔵ノ種子ナリ。《hrīḥ》字ハ是レ金行肺蔵ノ種子ナリ。金ハ能ク剋レスカ木ヲ故ニ肺モ亦剋レス肝ヲ。故ニ知ヌ以テ《hrīḥ》字ヲ為シ能破ト以テ《hūṃ》字ヲ為ス所破ト也[29]。

先ず、木を「主」り、《hūṃ》を本覚とする肝臓だが、右文によれば、《hrīḥ》が、その能破の字となる。同字が、肺臓の本覚だからである。

これも先に記す様に、五行の相剋であれば、火→金→木→土→水→火、五臓の相剋の理は、心→肺→肝→脾→腎→心の順で結ばれる。また、金から木へ結ばれる相剋の理は、金の堅固の性質が木の柔軟性に勝るから、とも言われる。何れにせよ、金に対応する肺は、木の肝臓に剋ち、二臓それぞれの本覚である《hrīḥ》と《hūṃ》も、前者が能破、後者が所破と理解される。

五臓相尅の理について、ここで少し補足しておくと、例えば『五輪九字明秘密釈』、ないし、その典拠となる『三種悉地軌』にも、「辛味多く肺に入れば肺を増し、肝を損す」と言った記述が見られる。[30] 栄西（一一四一―一二一五）『喫茶養生記』は、それらの記述を踏まえて、次のように端的に記す。

> 此五蔵、受レ（クルコト）味ヲ不レ同（シカラ）。好味多ク入ルトキ則チ其ノ蔵強ク尅シテ傍ノ蔵ヲ互ニ生レス病ヲ。[31]

五臓それぞれに好味があり、肝臓では酸、肺臓では辛、心臓は苦、腎臓は鹹、脾臓であれば甘となる。好味が身中に入れば、第一に、それを好む臓の勢力が増強される。次いで、その勢力を増した臓器が、傍らにあって、それと相尅の理を結んでいる臓の力を損なう。五臓それぞれに生じる種々の病があるが、基本的には、この五臓間の勢力の不均衡が原因とされる。

古代中国の宇宙観にとって、五行とその相生・相尅の理は、天・地・人の運行の根本にある、自然法則に類するものであるが、五臓の相尅を放置し、それを増大するままにしておいたならば、結果、身中に重大な疾患を生じかねないものでもあった。[32]

行者、當レ（マ）ニ観ス《hrīḥ》字ノ字義ヲ。作シ白色ノ観ヲ即チ思ニ惟スレバ本不生ノ理ヲ金ハ変シテ為リ智剣ト截ニ破シ《hūṃ》字ノ字相ノ無明妄想所生ノ五障百六十心等ノ三重ノ青色妄執ノ木性ヲ都テ尽シテ即チ更ニ生ニ長ス《hūṃ》字ノ字義ノ本不生五智金剛大菩提心木沙羅樹王ヲ。其色漸漸ニ増長シテ為ニル大円鏡智阿閦如来ト。即チ令ム見ニ現セ金剛菩提心ノ三摩地門ヲ。[33]

話を『五輪九字明秘密釈』に戻すと、修行者が、件の《hrīḥ》の字義を観想すると、その《hrīḥ》の金は一振りの「智剣」へ変じ、《hūṃ》の字相、内奥の字義に対する表層的な字の意味、その「無明妄想」、そこから生まれる五障や百六十心、木性の青色の気を帯びた妄執の全てを破壊する。そうすることで、《hūṃ》の字義も明らかとなり、それが漸次に増長すれば、五智の一である大円鏡智、その智の主、五仏の一である阿閦如来ともなると言う。

肺蔵ノ色ハ白ニシテ主ル金ヲ。即チ以テ《hrīḥ》字ヲ為ス其ノ本覚ト。以テ《trāḥ》字ヲ為ス能破ト。何者火性ハ尅レ金ヲ心ハ亦ヲ尅レス肺ヲ。以テ《trāḥ》字ノ字義ヲ破ス《hrīḥ》字ノ字相ヲ。[34]

次に、金に配される白色の、《hrīḥ》を本覚とする肺の記述だが、右文には、「火性は金を尅」すから、その火と対応する心臓も、金と対応する肺を損ずるとある。火の無定型の性質は、先に述べる金の堅固の性に勝る。そして、その心臓の本覚とされる《trāḥ》は、《hrīḥ》にとっての能破の種子となる。

是ノ故ニ以テ本不生五智金剛赤色ノ火ヲ焼ニ錬シ無明妄想所起五障百六十心等三重白色妄想ノ荒金ヲ変シテ為ス本不生五智金剛ノ慧真実白色ノ金ト。漸漸ニ増長シ成就シテ為ニル妙観察智無量寿如来ノ智慧金剛三摩地門ト。[35]

妙観察智が開顕されるまでの過程も、概ねは先の大円鏡智、《hrīḥ》の字義、《hūṃ》の字相の例と同じである。《trāḥ》の字義

が、《hrīḥ》の字相の妄執を破砕した結果、後者の字義が顕現する。その様は、火と、それが錬磨する金の関係でもって喩えられる。先ず、能破の《trāṭ》の字義は、本不生の「五智金剛赤色火」となる。次いで、未だ「荒金」でしかない《hrīḥ》の字相、その三重の白色の妄執を焼いて鍛え、本不生である五智金剛の「真実白色金」へと精錬する。そして、その真実の金が漸漸に増長した先に、妙観察智、阿弥陀が成就される。

心蔵ハ色赤シ主レル火ヲ。以テ《hrīḥ》字ヲ為シ本覚ト以テ《aḥ》字ヲ為ス能破ト。何者水性ハ尅レスレハ火ヲ腎モ亦タ尅レス心ヲ。然レハ則チ以テ《aḥ》字ノ字義ヲ破ス《trāṭ》字ノ字相ヲ[36]。

その、火に配される赤色の心臓は、水から火への相尅の理に随い、水に配される腎臓に損されることになる。腎臓の本覚である《aḥ》は、《trāṭ》にとっては能破であり、同字の字義が《trāṭ》の字相の妄執を砕く様は、本不生の「五智黒色水」が、妄執の火を沃滅する様に喩えられる。

更ニ出生シ《trāṭ》字本不生ノ五智福徳聚ノ金剛赤色ノ火ヲ漸漸ニ増長シ智火熾燃ニシテ為シ平等性智宝生如来ト即チ令ム見ニ現セ福徳金剛三摩地門ヲ。

その妄執の火が消し止められた後に、改めて、本不生の「五智福徳聚」の「智火」が燃え上がり、漸次に増長して、平等性智と宝生如来の成就となる。

腎ノ蔵ハ色黒主レル水ヲ。以テ《aḥ》字ヲ為シ本覚ト以テ《vaṃ》字ヲ為ス能破ト。何者土性ハ尅レシ水ヲ脾ハ亦タ尅レス腎ヲ。以テ《vaṃ》字ノ字義ヲ破ス《aḥ》字ノ字相ヲ[37]。

《aḥ》字を本覚とし、水を「主」る黒色の腎臓へは、脾臓（＝土）から相尅の理が結ばれる。その脾臓の本覚の《vaṃ》が、《aḥ》の能破となる。前者の字義は、五智金剛の不壊の「黄色地」と喩えられる。それが、無明妄想より起こる「黒色水」を埋め立てる。やがて、本不生の「五智金剛黒色八功徳水」が徐々に溢れ出てきて、そこから、成所作智と不空成就仏も出生する。

脾ノ蔵ハ色黄主レル土ヲ。以テ《vaṃ》字ヲ為シ本覚ト以テ《hūṃ》字ヲ為ス能破ト。何者木性ハ尅レスレハ土ヲ肝ハ尅レス脾ヲ。以テ《hūṃ》字ノ字義ヲ破ス《vāṃḥ》字ノ字相ヲ[38]。

最後に、《vaṃ》字を本覚とし、土行黄色の脾臓についてである。土には木、脾臓に対しては、肝臓が相尅の理を結ぶ。故に、前者の本覚である《vaṃ》の字相の妄執は、後者の本覚である《hūṃ》字の字義によって破られる。本不生の「五智金剛木」が、「黄色妄想土」を破砕し、「《vāṃḥ》字本不生五智金剛」の「不壊那羅延」「黄色本覚土」を出生する。それが漸次に増長し、法界体性智、大日如来が成就される。

五臓	五行	五色	本覚	能破	五仏	五智
肝	木	青	hūṃ	hṛiḥ	阿閦	大円鏡智
肺	金	白	hṛiḥ	trāḥ	阿弥陀	妙観察智
心	火	赤	trāḥ	aḥ	宝生	平等性智
腎	水	黒	aḥ	vaṃ	不空成就	成所作智
脾	土	黄	vaṃ	hūṃ	大日如来	法界体性智

以上、ここまで述べてきた五臓、五行、五色、その本覚と能破の五字、五仏、五智の対応を一覧にすると、右の図の様になる。[39] 修行者が、《hṛiḥ》→《trāḥ》→《aḥ》→《vaṃ》→《hūṃ》の順で、能破の種子の字義を観想すれば、本覚の種子の字義が、《hūṃ》→《hṛiḥ》→《trāḥ》→《aḥ》→《vaṃ》の順で、循環的に顕現する。その結果、大円鏡智→妙観察智→平等性智→成所作智→法界体性智の順で、修行者の身中に五智が成就される。

『《vaṃ》字密観』における五智種子真言の字輪観

大山公淳氏の指摘では、智通（生没年未詳）訳『観自在菩薩怛嚕多唎随心陀羅尼経』、菩提流志（生年未詳―七二七）訳『不空羂索神変真言経』に、既に、字輪観の萌芽とも言うべき記述が見られると言う。[40]『密教大辞典』は、不空（七〇五―七七四）訳『阿閦如来念誦供養法』の文を、字輪観の典拠とする。[41]

即入二リテ字輪観一ニ於二心月輪ノ上一ニ行二列シ真言ノ字一ヲ。金色ニ具二フ威光一ヲ
思二惟ス実相理一ヲ。[42]

先ず、胸中に構想する「心月輪」に種子真言を「行列」する。その金色の威光を具えるそれを観想し、実相の理を思惟するとある。

また、『大日経疏』には、行者が真言を念誦したならば、入息がそうであるように、その最初の種子より、口腔を通じて身中に流入する。真言が身中に遍満して、やがて、身のあらゆる箇所を巡り終えたなら、次に、出息の如く口より出でて、再び、真言の本尊の元に還る。あるいは、その、吸気と共に身中に入った種子真言が月輪にまで至れば、そこに布列し旋転する、とある。「正念誦」の一連の過程に、字輪観も組み込まれる。[43]

更に、先述の大山氏の言である。「心月の上に種子を旋転観布するにある而して種子を観じて直に本尊とする」とは、これは、字輪観の中でも「略」のものである。「広」の字輪観では、種子、三昧耶形、尊形と次第に月輪中に観じ、その上で「仏身を円満し、本尊と我と入我々入して、更に進み法界体性三昧を成ぜんとする」と言う。また、場合によっては、全ての種子、三昧耶も尊形をも忘れて、ただ心月輪をのみ観じることこそ、字輪観の終極ともされる。[44]

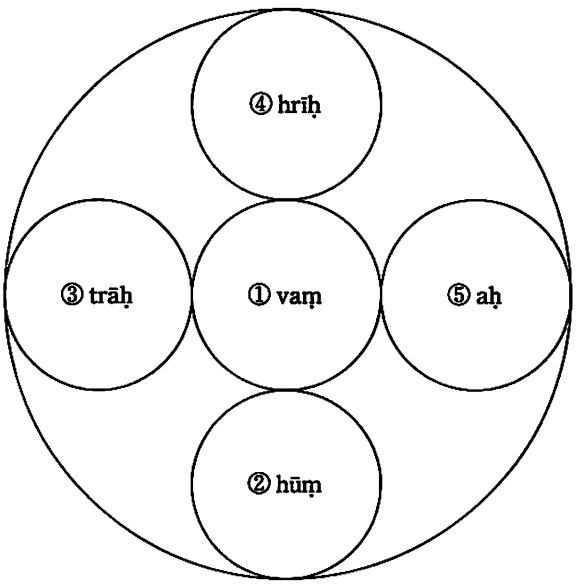
覚鑁『《vaṃ》字密観』が明かすのは、《vaṃ》《hūṃ》《trāḥ》《hṛiḥ》《aḥ》の「五智種子真言」を用いる同字輪観の手順と、及び、その得果である。[45] 右の種子群を心月輪中に布列して、順（右回り）

逆（左回り）に旋転して、種子ごとの形相や字義を順次に観想する。以下が、その字輪の順・逆二観の詳細な手順、それを経ての五智成就に関する『《vaṃ》字密観』の記述である。

> 依ニルカ《vaṃ》字門言説不可得ノ理ニ故ニ得レ證ニスルコトヲ《hūṃ》字門因業不可得ノ理ヲ也。依ニルカ《hūṃ》字門因業不可得ノ理ニ故ニ得レ證ニスルコトヲ《trāḥ》字門行業不可得ノ理ヲ。依ニルカ《trāḥ》字門行業不可得ノ理ニ故ニ得レ證ニスルコトヲ《hrīḥ》字門智業不可得ノ理ヲ。依ニルカ《hrīḥ》字門智業不可得ノ理ニ故ニ得レ證ニスルコトヲ《aḥ》字門事業不可得ノ理ヲ。依ニルカ《aḥ》字門事業不可得ノ理ニ故ニ得レ證ニスルコトヲ《vaṃ》字門言説不可得ノ理ヲ已上順観[46]。

順観は、右に言う様に、中央の《vaṃ》から、《hūṃ》→《trāḥ》→《hrīḥ》→《aḥ》→《vaṃ》の順で旋転しての、種子一々の形相を循環的に観想することから始まる。続いて、それら字の義の観想へと移行する。字義も、言説不可得の理→因業不可得の理→行業不可得の理→智業不可得の理→事業不可得の理→言説不可得の理の順で循環せられ、その一々の義の「得證」は、右順の中での、先行する種子の観想により達成されると言う。

種子の旋転、循環の順について図示すれば、以下の様になる。五番目の《aḥ》の観想の後には、再び中央《vaṃ》へ還る。

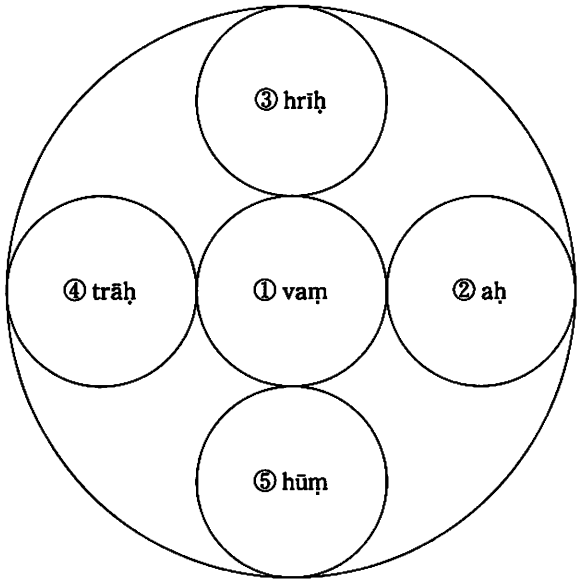


次に、順観に対する逆観の場合、《vaṃ》を出発点とすることもあれば、第五の《aḥ》まで順観が進んだ後、同字より始まるとされることもある[47]。

> 依ニルカ《vaṃ》字門言説不可得ノ理ニ故ニ得レ證ニスルコトヲ《aḥ》字門事業不可得ノ理ヲ。如レクハ是ノ依ニリテ《aḥ》字門ノ字義得レ證ニスルコトヲ《hrīḥ》字門之義ヲ。依ニリテ《hrīḥ》字門之義ニ得レ證ニスルコトヲ《trāḥ》字門ノ字義ヲ。依ニリテ《trāḥ》字門字義ニ得レ證スルコトヲ《hūṃ》字門之義ヲ。依ニリテ《hūṃ》字門之義ニ得レ證ニスルコトヲ

《vaṃ》字門ノ義理ヲ已上逆観[49]。

『《vaṃ》字密観』の右の文に拠るならば、最初に《vaṃ》、次いで《aḥ》へ進み、更に《hrīḥ》→《trāḥ》→《hūṃ》の順で各種子の形相を観想し、最後に再び、《vaṃ》へ戻ることになる。また、字義の逆観でも、言説不可得の理→事業不可得の理→智業不可得の理→行業不可得の理→因業不可得の理と観想し、最後に言説不可得の理へと還って、五字全ての字義を證得するという手順となる[50]。この記述によって、五智種子真言の逆観を図示したならば、基本的には、次のようになる[51]。



『《vaṃ》字密観』では、種子一々の形相と字義に関する順・逆の観想を経たならば、更に、行者の眼・耳・鼻・舌・身の五識、末那、阿娜那、阿頼耶、阿摩羅の各識のそれぞれが、五字の字義の一々と相応する。

如レノ是ノ五智ハ従リ何レノ処ニ一生スル耶。従リ自心界ニ一出生スル也。其ノ出生ハ如何耶。阿摩羅識無漏本不生ノ理ト与ニ《vaṃ》字言説不可得ノ理ニ一相応シテ生ニスル法界体性智ヲ一也。阿頼耶識無漏本不生ノ理ト与ニ《hūṃ》字門因業不可得ノ理ニ一相応シテ生ニスル大円鏡智ヲ一也。阿娜那識無漏本不生ノ理ト与ニ《trāḥ》字門行業不可得ノ理ニ一相応シテ生ニス平等性智ヲ一。末那識無漏本不生ノ理ト与ニ《hrīḥ》字門智業不可得ノ理ニ一相応シテ生ニス妙観察智ヲ一。眼等ノ五識無漏本不生ノ理ト与ニ《aḥ》字門事業不可得ノ理ニ一相応シテ生ニスル成所作智ヲ一也[52]。

そこで転識得智が起こって、行者の「自心界」（法界である自らの心）より、五仏とその五智が発生すると、右の文には記す。五字の字義から識、五智までの対応を、以下にまとめて図示しておく[53]。

- 《vaṃ》—言説不可得理—阿摩羅識—法界体性智
- 《hūṃ》—因業不可得理—阿頼耶識—大円鏡智
- 《trāḥ》—行業不可得理—阿娜那識—平等性智
- 《hrīḥ》—智業不可得理—末那識—妙観察智
- 《aḥ》—事業不可得理—眼等の五識—成所作智

更に一点補足しておくと、五智へ転じた五字は、五仏それぞれの三昧耶身を出生するとも、『《vaṃ》字密観』では説かれる。先に言

う「略」の字輪観から、「広」のそれへの展開である。すなわち、法界体性智に転じる《vaṃ》であれば、「法界率都婆」である。大円鏡智の《hūṃ》は、五鈷杵である。平等性智の《traṃ》であれば、金剛の摩尼宝となる。妙観察智《hrīḥ》であれば、「開敷紅蓮華」、成所作智に転ずる《aḥ》は、金剛羯磨杵となる。[53]

ここまで述べてきた五智種子真言の字輪観と、『五輪九字明秘密釈』における金剛界系の五臓三摩地観とでは、第一に、種子真言を旋転し、その字義を観想する順に大きな異なりがある。前者の字輪観における順・逆の二観、後者の五臓三摩地観における能破の字義の観想、本覚の字義の顕現の順次に、一致する点は皆無である。また、後者の内には、能破や本覚、所破と言った、前者には見られない概念も、少なからず含まれる。

とは言え、その差異以上に際立つのが、両観法間の構造的な類似である。そもそもが、同じく《vaṃ》以下の五字の真言を、共に身中にて旋転、循環させると言う瞑想法である。次に、循環の輪の中で先行する種子の字義を観想することが、続く種子の字義の得證、あるいは顕現となる。そして、最後に、字義の獲得自体が五智の成就へ繋がる点も、両観法で共通している。

『五輪九字明秘密釈』『《vaṃ》字密観』の相互連関

以上の検討から、覚鑁が、『五輪九字明秘密釈』の執筆に際し、金剛界の五臓三摩地観を構想するにあたっては、自ら『《vaṃ》字密観』で説示した五智種子真言の字輪観を下敷きにした、と推測する。引き続き、その推測を支える傍証である。最初に、『《vaṃ》字密観』と『五輪九字明秘密釈』の、両文献の記述間にある結びつきについて指摘しておく。

『五輪九字明秘密釈』で、胎蔵界の五輪の種子を五行と五臓へ配当するにあたっては、一つ、確たる理由が提示される。

> 復次《a》字ハ金剛部阿閦ニシテ主ニル肝蔵ト眼識ヲ。（中略）今肝ハ主リ魂ヲ、魂神ノ気ハ為ス東方ノ木精ト。[54]

《a》は、五仏の阿閦仏、東に対応し、一方、五行説では木、五臓では肝臓が、五方の東と対応する。すなわち、東という方位が合致するから、《a》、阿閦仏、木、肝臓は、同一のグループとされる。《vaṃ》《raṃ》《haṃ》《khaṃ》、金・火・水・土、肺・心・腎・脾についても同様で、西・南・北・中央の仲介があって、それぞれ、同一のカテゴリーへとまとめられる。[55]

《vaṃ》から《aḥ》の五字、五臓の本覚については、右の胎蔵界の場合と異なり、その配当の理由付けは、『五輪九字明秘密釈』中に記されない。次の『《vaṃ》字密観』の記述を踏まえて、初めて、配当に関する理由も理解される。

> 東方金剛部ハ、月輪ニ有リ《hūṃ》字ト、変シテ成ニル五鈷杵ト、転シテ成ニル阿閦尊ト、青色ニシテ放ニチ青光ヲ、安ニ住ス触地ノ印ニ。[56]

五部中の金剛部の種子である《hūṃ》は、右文では、五仏の阿閦仏、五智の大円鏡智、更には、その阿閦仏の居する東方を表象する

種子ともなる。一方、木に対応する肝臓も、先述する様に、五方の内では東に配当される。あるいは、宝部の種子《trāḥ》は、転じて宝生如来、同仏の占める南と対応する。五行説では、火と心臓が南と対応する。蓮華部の種子《hrīḥ》は、無量寿仏、同仏の浄土のある西と対応する。五方の西と対応するのは、金と肺である。羯磨部の種子である《aḥ》は、転じて不空成就仏と成り、北方と対応する。五方の北は、五行では水行、五臓では腎臓に対応する。[57]

ここに中央如来部、《vaṃ》字、大日如来、土行＝脾臓を加えれば、次の一覧となる。同じく方位が媒介する相互の連関を前提に、《vaṃ》《hūṃ》《trāḥ》《hrīḥ》《aḥ》のそれぞれは、五臓の本覚、五行の一々へ配当されるのである。[58]

五字	五部	五智	五仏	五方	五臓	五行
hūṃ	金剛	大円鏡智	阿閦	東	肝	木
hrīḥ	蓮華	妙観察智	阿弥陀	西	肺	金
trāḥ	宝	平等性智	宝生	南	心	火
aḥ	羯磨	成所作智	不空成就	北	腎	水
vaṃ	如来	法界体性智	大日如来	中央	脾	土

次に、『五蔵曼陀羅和会釈』で明らかとなる、金剛界の五臓三摩地観と五智種子真言の字輪観、及び『五輪九字明秘密釈』と《vaṃ》字密観』との間の関連性について述べておく。[59]第一に、真鍋俊照氏は、この『五蔵曼陀羅和会釈』を指して、興教大師覚鑁の『五輪九字明秘密釈』に説かれている「五蔵曼荼羅の注釈書の一種」とする。[60]その様に評する理由は、同書の下帖に、『五輪九字明秘密釈』の五臓三摩地観の記述が、「師伝の五蔵曼荼羅に云わく」として論及されるからである。

師伝ノ五蔵曼荼羅ニ云ハク其レ五蔵ハ肝心脾肺腎也。青ハ主レリ木ヲ《hūṃ》字ヲ以ヲ為シ本覚ト以テ《hrīḥ》字ヲ為ス能破ト。何者吽字ハ是レ即チ木ノ種子也。紇哩字ハ是レ金ノ種字亦肺種子ナリ。金ハ能ク尅ス木ヲ肺モ亦尅レス肝ヲ故智以テ紇哩字ヲ為シ能破ト以テ吽字ヲ為ス所破ト也。[61]

《hūṃ》は、木に対応する肝臓の種子である。一方、紇哩《hrīḥ》は、金行と肺臓にとっての種子である。金と肺は、それぞれ木と肝とを損する存在であるから、《hrīḥ》は《hūṃ》にとっての能破、《hūṃ》はその所破の種子となる。本覚の語こそ用いられていないものの、先に検討する金剛界の五臓三摩地観そのままの記述が繰り返される。

肺蔵ノ色ハ白ニシテ主レル金ヲ即チ以テ《hrīḥ》字ヲ為ス其ノ本覚ト以テ《trāḥ》字ヲ為ス其能破ト。何者火性ハ尅レシ金ヲ心ハ亦タ尅レス肺ヲ。以テ《trāḥ》字々義ヲ破ス紇哩字ノ々相ヲ。是ノ故ニ以テ本不生五智金剛赤色火ヲ焼ス絲シ無明妄相所起五障百六十心等三重白色妄相ノ金ヲ変シテ為ス本不生五智金剛恵真実白色ノ金ト。漸増長シ成就シ為ニル妙観察智無量寿如来者智恵三摩地門也。[62]

火から金、心臓から肺臓への相剋、それに伴い、前者の本覚である《trāḥ》字が、後者の《hrīḥ》の能破となる等の記述は、異体字の使用や、僅かの字の異同を除いて、ほぼそのまま、『五輪九字明秘密釈』の文の引き写しである。残りの心・胃・脾の三臓と、その本覚の種子である《trāḥ》《aḥ》《vaṃ》、能破となる《aḥ》《vaṃ》《hūṃ》の三字に関しても、同じく『五輪九字明秘密釈』そのままの記述となる。

以上を踏まえ、同じく『五蔵曼陀羅和会釈』上帖の冒頭について見ると、そこには、以下の様な文が掲載される。

東方ハ者五仏ノ中阿閦仏ニシテ五智ノ中ハ大円鏡智ナリ五部ノ中ノ金剛部ノ種子云ヒ《hūṃ》十三摩耶形ハ表五胎金剛杵是也。（中略）亦是レ木生ノ仏也。[55]

先の『《vaṃ》字密観』にあった、東と阿閦仏、大円鏡智、それが転じた三昧耶形である五鈷杵、更に興味深い事に、五行の木との対応までが、右文には明記される。三昧耶形については、『《vaṃ》字密観』には、次のようにある。

是ノ五智ノ種子ノ字転シテ生ズ五ノ三昧耶身ヲ。法界体性智《vaṃ》字門転シテ為ニル法界率都婆身ト也。大円鏡智《hūṃ》字門転シテ為ニル五鈷金剛杵身ト。平等性智《trāḥ》字門転シテ為ニル金剛摩尼宝ト也。妙観察智《hrīḥ》字門転シテ為ニル開敷紅蓮華ト也。成所作智《aḥ》字門転シテ為ニル金剛羯磨杵ト也。[56]

続いて、転じては「開敷紅蓮華」の三昧耶形をとるとされる《hrīḥ》字であるが、『五蔵曼陀羅和会釈』には、次のように記される。

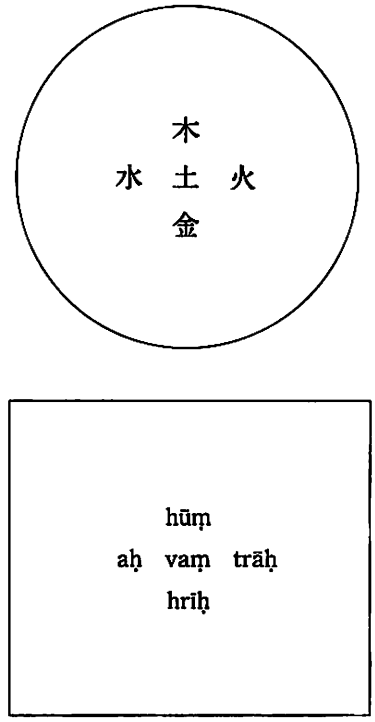
西方者ハ五仏。[中]無量寿仏ニシテ五智ハ妙観察智ナリ五部ノ中蓮華部ノ種子云ヒ《hrīḥ》十三摩耶形ハ表開敷蓮花是ナリ。（中略）亦是レ金姓ノ仏也。[57]

『《vaṃ》字密観』の通り、西方と阿弥陀仏、その妙観察智、五部中の蓮華部が《hrīḥ》に配当される。その上で、阿弥陀を西方＝「金姓」の仏ともする。残りの《trāḥ》《aḥ》《vaṃ》についても同様で、五方、五仏、五智、五部との対応は、先の一覧の通りである。その宝生・不空成就・大日如来の三仏は、また、それぞれ「火姓」「水姓」「土姓」の仏ともされる。[58]

以上、確認するように、『五蔵曼陀羅和会釈』と言う一組の書物の中で、『五輪九字明秘密釈』と『《vaṃ》字密観』の記述が同時に論及され、五臓相剋の理、金剛界の五臓三摩地観、五智種子真言とその字輪観、五行説と言った要素が、一連なりのものとして扱われている。その上で、左の様な図までが、『五蔵曼陀羅和会釈』には掲載される。

上では、肝から脾の五臓に対応する木から土の五行が、胸中に構想される月輪に布字される。下では、その五行、五臓の本覚ともなる《hūṃ》から《vaṃ》の五字の、同じく月輪中に布字される順が描かれる。[59]この図こそ、『《vaṃ》字密観』の五智種子真言の字輪観と五行思想との融合と考える。ここまで来たならば、『五輪九字明

秘密釈』の金剛界の五臓三摩地観へも、あと一歩である。あるいは、字輪観より五臓の三摩地観にいたる展開で、ちょうど両者の中間点に立ち、それらを仲介する存在だったのが、左図の様な構想であったとも考えられる。



結　論

ちょうど、五字厳身観における腰下・臍・胸・頂・眉間の身体の五支分が、胎蔵界の五臓三摩地観において五臓と置き換わる様に、《vaṃ》から《aḥ》の字を観布する場所が、字輪観で言う胸中の月輪から腹中の五臓に変わって、金剛界の五臓三摩地観が有る。五智開発の観法としての骨組みは、後者に有っても、そのままに残る。逆に言えば、それが残るからこそ、五臓相対の理に随って循環する本覚の五字を観想し、その字義を顕現したところで、行者の内に五智が成就されうる。《vaṃ》から《aḥ》の五字も、変わることなく、五智を表象する種子真言である。

また、その五字の旋転・循環の順序は、二観法の間で随分と異なるが、それは、骨組みが同じ上での肉付けの差異でしかない。五臓三摩地観は、五字を循環させる法則を、中国古代の宇宙論である五行説、その五臓相対の理に拠っているが、字輪観はそうではない。それが循環の順の異なりと現れるが、観法の本質的な性質を左右するものではない。

五智種子真言の字輪観を下敷きに、金剛界の五輪の種子を用いる五臓三摩地観が成立するとの推論を傍証する証拠だが、その一つが、『《vaṃ》字密観』と『五輪九字明秘密釈』の記述間の強い連関性である。後者において、《vaṃ》から《aḥ》までの五字が、脾から腎までの五臓それぞれの本覚に配される論理は、前者の五智種子真言の釈が有ってはじめて理解されうる。『五蔵曼陀羅和会釈』も、この二書間の、そして五智種子真言の字輪観と、金剛界の五臓三摩地観との結び付きを論証する上で、恰好の事例となる。

以上の検討から、次の様な指摘も可能である。胎蔵と金剛の五臓三摩地観の何れも、五字厳身観と字輪観と言った密教観法を下敷きに、そこに五行や五臓に関する古代中国の思惟を組み合わせたものである。その上で、前者は、五臓の一々を五輪と観じ、最終的に、行者自身を率都婆と化す、言い方を変えれば、石で出来た五輪塔の

如く、強固で何ら漏れ出る所の無い完全な存在へ、身体を作り換える瞑想と言える。後者は、身中に病すら引き起こしかねない五臓の相剋を観想し、結果、五智を成就する。すなわち、前者の逆に、漏れ出る所の多い不完全な身体そのものから仏智を引き出す瞑想となる。この様に類型化すれば、胎蔵と金剛両界の五臓三摩地観は、その志向する所から、実は、全くの逆であったとも考えられる。[58]

註

① 富田敬純編輯『興教大師全集』（一九三五年、世相軒、以下『興全』）巻下・一一四三頁参照。

② 『興全』巻下・一一三六頁参照。

③ 密教の聖域空間の細密図的現出、具象的に「外」に現れた曼荼羅に対する「内」なる曼荼羅、人間の身体の内で象徴的に表現される曼荼羅が、ジュゼッペ・トゥッチ氏言うところの「身体マンダラ」である。頼富本宏氏は、不可視の「我々の個別的人間存在の複雑にして全体的な小宇宙を、一つの統一体たるマンダラと考えるもの」を、内の曼荼羅とする。ジュゼッペ・トゥッチ『マンダラの理論と実践』（ロルフ・ギーブル訳、一九八四年、平河出版社）一七六頁、頼富本宏『密教とマンダラ』（一九九〇年、日本放送出版協会）一六二頁参照。

④ 『大正新脩大蔵経』（以下『大正』）巻十八・二二五頁上段参照。

⑤ 『大正』巻十八・二六三頁中段参照。

⑥ 『興全』巻下・一一三三頁、及び一一四六頁参照。前者では、《vaṃ》の一字が変じて、金剛界の五輪種子を成ずること、後者では、《vaṃ》から《aḥ》までの一連の種子を、金剛界のそれと明言する。なお、悉曇については、〈 〉中にローマ字化したものを記載し、その形式でもって表記することを基本とする。

⑦ 那須政隆『五輪九字秘釈の研究』（一九三六年、鹿野苑）。

⑧ 吉岡義豊「五輪九字秘釈と道教五蔵観」（『密教文化』六十九・七十合併号、一九六四年）。

⑨ Hendrik van der Veere, *A Study into the Thought of Kōgyō Daishi Kakuban: With a Translation of His Gorin kuji myō himitsushaku* (Leiden: Hotei publishing, 2000).

⑩ 松崎惠水『平安密教の研究—興教大師覚鑁を中心として—』（二〇〇二年、吉川弘文館）。

⑪ 右記のもの以外では、栗山秀純「『五輪九字明秘密釈』における五蔵三摩地観」（『豊山学報』十三号、一九六七年）、同「興教大師覚鑁の瑜伽観行—五蔵三摩地観を中心として—」（『大正大学研究紀要』第七十一輯、一九八六年）、北条賢三「五蔵三摩地観の系譜とその特徴」（『興教大師覚鑁研究』、一九九三年、春秋社）等が挙げられる。

⑫ 松崎前掲書三九二頁参照。

⑬ 田中文雄「『五輪九字秘釈』の背景思想に関する一管見—道教・医学の両側面について—」（『豊山教学大会紀要』十二号、一九七九年）、同「『五輪九字秘釈』と養生思想」（『中国古代養生思想の総合的研究』一九八八年、平河出版社）。

⑭ Jinhua Chen, *Legend and Legitimation: The Formation of Tendai Esoteric Buddhism in Japan* (Bruxelles: Institut belge des hautes études chinoises, 2009).

⑮ 那須前掲書一七一頁参照。

⑯ 田中「『五輪九字秘釈』と養生思想」六九〇—六九二頁参照。

⑰ Chen前掲書一九一頁参照。

⑱ 『興全』巻下・一一四三頁参照。

⑲ 中国古代の宇宙観では、時に人格的にも把握される自然世界（「天」）と、その下に生きる「人」とは、細部にわたり相関の関係を結ぶと言う。『淮南子』では、一年の二十四の節気は、同じく二十四ある椎骨と相応し、十二の気管輪であれば十二ヶ月、三百六十五の骨は、一年の三百六十五日となる。金・木・土・水・火の五行は、肺・

肝・脾・腎・心の五臓と対応する。アンリ・マスペロ『道教』（川勝義雄訳、二〇〇〇年、平凡社）四十八―四十九頁、及び一五七―一五八頁、石田秀実『中国医学思想史　もう一つの医学』（一九九二年、東京大学出版会）九十九―一〇〇頁参照。

⑳ Chen 前掲書二三二―二三七頁参照。

㉑ 五字厳身観と胎蔵界の五臓三摩地観について補足すると、前者は、腰下・臍・胸・頂・眉間の身体の五支分それぞれを、方・円・三角・半月・点の五形で表される五輪の一々と瞑想する。次に、その五形ないし五輪の内に、五輪の種子の一々を布字する。結果、行者自らの身体が五輪塔と化し、その塔を三昧耶形とする大日如来との合一が果たされる。後者では、五字厳身観で言う五支分が五臓に置き換わり、更に、五字、五輪、五形のみならず、五智、五仏、五方、九識と、更に、五行、五方、五味、五気、五季と言った、古代中国の思惟において多用される諸概念との相互連関も説示される。『大正』巻三十九・七二七頁下段、『興全』巻下・一一三九―一一四三頁参照。

㉒ 大山公淳「密教観法の研究」（『密教研究』七号、一九二二年）五〇頁下段参照。

㉓ ファン・デル・フェーレ氏は、この『〈vaṃ〉字密観』も含め、『〈vaṃ〉字義』や『〈vaṃ〉字義鈔』と言った著作は、何れも『五輪九字明秘密釈』の草稿であったと見る。van der Veere 前掲書一二五、一三九―一四一、二一七頁参照。

㉔ 『興全』巻下・一一八〇頁。

㉕ 教尋の履歴、生没年、覚鑁との関係については、櫛田良洪『覚鑁の研究』（一九七五年、吉川弘文館）八十二―八十七頁、及び、那須前掲書三二一―三二二頁参照。

㉖ 『興全』巻下・一一四九―一一五〇頁。

㉗ 吉岡前掲論文八十一頁・上段―八十八頁下段参照。

㉘ 『大日経』「秘密曼荼羅品第十一」の記述に端を発し、その後に『大日経疏』、『三種悉地軌』を経て体系化されたと言われる。頼富本宏「密教の身体マンダラ観」（『中国古代養生思想の総合的研究』）七〇八頁参照。

㉙ 『興全』巻下・一一四七頁。

㉚ 『興全』巻下・一一四〇頁参照。

㉛ 栄西『喫茶養生記』（古田紹欽全訳注、二〇〇〇年、講談社文庫）八十一頁。

㉜ その五臓間の勢力の不均衡を解消する為、『黄帝内経太素』等の古代中国医学書は、最初に食餌による治療の方途を提示する。すなわち、相剋の中での、損される側の臓器の力の減退が生じると、損する側の臓器の好む味を制限し、力の過度の増大（および減退）を抑制する。五臓間に生じた力の不均衡を、徐々にではあっても回復する。『黄帝内経太素』巻二には、「五禁とは、肝病は辛を禁じ、心病は鹹を禁じ、脾病は酸を禁じ、腎病は甘を禁じ、肺病は苦を禁ず」とある。田中「『五輪九字秘釈』と養生思想」六八九頁参照。

㉝ 『興全』巻下・一一四七頁。

㉞ 『興全』巻下・一一四八頁。

㉟ 『興全』巻下・一一四八頁。

㊱ 『興全』巻下・一一四七頁。

㊲ 『興全』巻下・一一四八頁。

㊳ 『興全』巻下・一一四八―一一四九頁。

㊴ 『興全』巻下・一一四六―一一四九頁、及び那須前掲書一六八―一七八頁参照。

㊵ 大山前掲論文五十二頁上段―五十三頁上段参照。

㊶ 『密教大辞典　縮刷版』（一九八三年、法蔵館）一二三八頁・中段参照。

㊷ 『大正』巻十九・十九頁下段。

㊸ 大山前掲論文五〇頁上―下段参照。

㊹ 大山前掲論文四十九頁下段―五〇頁上段参照。

㊺ 『興全』巻下・一〇七九頁。

㊻「興全」巻下・一〇七八頁。

㊼「興全」巻下・一〇七八―一〇七九頁の記述では、順・逆二観ともに、中央の《vaṃ》より開始され、再び、そこに還る旨が記されるが、同一〇八九―一〇九〇頁に掲載される図では、順観を《aṃ》で終えた後、同字より逆観が始まり、そこから、《hrīḥ》→《hūṃ》→《vaṃ》へと進む旨が記される。

㊽「興全」巻下・一〇七八頁。

㊾「興全」巻下・一〇七八頁参照。

㊿順・逆二観の図については、「興全」巻下・一〇七八―一〇七九、一〇八九―一〇九〇頁参照。

(51)「興全」巻下・一〇七九頁。

(52)「興全」巻下・一〇七九頁参照。

(53)「興全」巻下・一〇七九―一〇八〇頁。

(54)「興全」巻下・一一三九頁。

(55)「興全」巻下・一一三五―一一三六頁、及び、那須前掲書一〇四―一〇五、一二六―一四七頁参照。

(56)「興全」巻下・一〇八四頁。

(57)「興全」巻下・一〇八四頁参照。

(58)那須前掲書一七〇―一七一頁参照。

(59)「五蔵曼陀羅和会釈」は、金沢文庫寄託称名寺聖教中に、「永仁五年(一二九七)六月十四日」の識語を持つ、上・中・下の三帖からなる写本が、名古屋の真福寺大須文庫には、書写年不明の、外題に「五蔵曼陀羅和会釈」、「伝金剛王院」と記される巻子の写本が伝わる。内容は、金沢文庫のものの上帖に該当する。本論で用いる「金沢文庫資料全書　第六巻　真言篇(一)」(一九八二年、神奈川県立金沢文庫、以下「金資全　第六」)収録のものは、前者の翻刻である。真福寺大須文庫のものでは、「長寛二年(一一六四)七月六日、寛慶撰云々」の識語を持つ、「五蔵曼荼羅」との尾題を付された巻子本が、残りの中・下帖に該当する。「中世宗教テクスト体系の復原的研究―真福寺聖教典籍の再構築―」(平成十九年度～平成二十一年度科学研究費補助金(基礎研究(B))研究成果報告書、平成二十二年、研究代表者：阿部泰郎)参照。京都青蓮院吉水蔵に、元永元年(一一一八)の識語を、来迎院如来蔵には、更に古い寛徳二年(一〇四五)書写の「五蔵曼荼羅」が現存すると言う。石原明「印度解剖学の成立とその流伝(清涼寺釈迦像胎内五蔵研究　第四報)」(『日本医史学雑誌』七巻一―二号、一九五六年)八十一―八十四頁、同「日本生理学前史」(『明治前日本医学史　増訂復刻版』収録、財団法人日本古医学資料センター、一九七八年)六十―六三頁参照。

(60)「金資全　第六」二九二頁下段参照。

(61)「金資全　第六」二四〇頁下段―二四一頁上段。

(62)「金資全　第六」二四一頁下段。

(63)「金資全　第六」二一九頁下段―二二〇頁上段。

(64)「興全」巻下・一〇七九―一〇八〇頁。

(65)「金資全　第六」二二〇頁上段。

(66)「金資全　第六」二二〇頁上―下段。

(67)二図については、「金資全　第六」二一九頁下段参照。

(68)五蔵の概念が、五輪塔に関する象徴主義と結びつくことで、胎蔵界の五蔵三摩地観が成立し、結果、仏教ないし密教行者の身体が思考されうる対象、身体が大宇宙に対する小宇宙と言った、ある方向付けの為されたものとなる。では、生体の循環に関する古代中国のイマジネーションを字輪観と重ね合わせ、金剛界の五蔵三摩地観を打ち出すことには、それに対する、いかなる意義が有ったのか。本稿を踏まえた今後の検討課題である。Bernard Faure, *Visions of Power: Imagining Medieval Japanese Buddhism* (Princeton: Princeton University Press, 1996) 参照。